

## はじめに

学校長 伊藤正広

平成七年一月十七日未明、兵庫県南部を襲った阪神・淡路大震災によって瞬時にして五千五百余名の尊い命が奪われ、未曾有の災害をもたらしたあの震災から一年が過ぎました。

この震災で痛ましい犠牲となった今は亡き本校生三名の御霊に改めて心から哀悼の意を表します。

戦後五十年の節目の年に起きた思いもかけぬこの震災で、多くの人が肉身や家を失い、将来の夢まで押し潰され、人生観が変わる程の大きな災害となりました。

災害に対する教訓として、「災難は忘れたころにやってくる」、「備えあれば憂いなし」と言われてきました。現実には、一時は都市機能が完全にストップした中で、その時、学校はどう対応したか。生徒・職員の安否の確認、校舎や施設・設備の被害状況や安全の確認、避難者への対応、総てが緊急を要するものばかりであり、電話も通じず、連絡がとれない中で、暗中模索の連続でありました。

日が経ち、落ち着きを取り戻す中で、避難所と学校の関わり、生徒・職員の被害状況の把握、災害下の学校の再開、兵庫県・芦屋市・自衛隊・警察・保健所及びNTT等関係機関との連絡調整、さらに、復旧の見込みの立たない中で、避難所と学校の共生をいかに図るか、そのための連絡調整や協力態勢の組織化など課題が山積みいたしました。そうした中で、避難者千名を超す人々に対し、支援物資の受け渡し等、支援活動に積極的に従事した本校の職員や生徒自治会を中心とするボランティアの活躍が目を引きました。当初は、筋書きもマニュアルもない中で、大きなトラブルもなく、緊急事態を乗り切れたのは、生徒・職員が一体となれたこと、住民の理解と協力が得られたこと、また、関係機関の強力な支援など人の絆によるものでありました。

震災から一年を経て、復旧・復興が一段と進む中、留意すべきは、心のケアの問題です。アンケート調査等の記録によると震災のショックから受けた心の傷は長く潜在し、想像以上のものがありました。この度の震災により、防災対策として、建物や施設・設備の強度等、耐震性が強調されていますが、心のケアを考えると、平素から心の耐震構造なるものも必要ではないか。暗愁を乗り越えて、苦しみや悲しみをバネに強く生き抜く力を備えたいものです。

この度の震災に寄せられた多くの皆様からの激励や御厚情に勇気づけられ、大きな励みとなりましたことを心よりお礼申し上げます。

おわりに、この記録集の発刊にあたり、記録や資料、感想文等を寄せていただきました関係の皆様にお礼申し上げますと共に、兵庫県教育委員会がすすめている「いきいきハイスクール推進事業」の一つとして、今後の災害に備える貴重な記録として残すことが出来たことを深く感謝いたします。

暗愁を乗り越えて

## I. 学校関係

### 【1. 1月17日～1月31日】

- 17日（火） 午前5時46分、地震発生。
- 校舎3棟（本館・中館・南館）中2棟（中館・南館）、破損状況酷く使用不能状態、本館は1階が漏水のため浸水。
- 午前7時前頃、本校職員が避難所として体育館を開放する。100名程の人が、体育館が開くのを待っていた。時が経つに従って避難者増加。
- 午前8時頃、幾人かの生徒が登校する。居合わせた職員の判断で、自宅待機を指示する。
- この日、出勤出来た職員延べ約15名が対応した主なこと、
- ・避難所として体育館を開放。
  - ・避難者の世話。柔道用畳・マット等の提供、体育館2階にテレビの設置。救急医療用品の提供（本館保健室より搬入）。養護教諭を中心に負傷者の手当て、老人の介護等にあたる。
  - ・危険区域に立入禁止の掲示（中館・南館）。
  - ・登校生徒に自宅待機の指示。
  - ・市当局への連絡。（市当局は本校が避難所になっていることを確認出来ていなかった。午後3時頃担当者来校。）
- 避難者数の増加に伴い、体育館2階フロアに加え体育館1階（剣道場・卓球場・食堂）、柔道場を開放する。夜にかけて、1000名を越す。
- ライフラインのうち、電気のみが午前8時前には復旧していた。
- 電話はほとんど不通状態が続いた。
- 夜になって市当局の手配によるおにぎりの配給あり。ただし質・量ともに不十分。

《解説》この日来校し得た延べ約15名の職員は、協議の場をもって行動したのではない。学校に居れた時間帯もばらばらだし、各所に散らばって行動していたので、近場の者との相談はあったろうが、基本的に個人の判断で動いたと思われる。午前7時過ぎ頃、やっと学校長から本校職員に電話（公衆）がつながり、学校の被害状況や様子を学校長に伝えることができ、学校長から幾つかの指示を受けることもできた。あとは居合わせた職員それぞれが、状況判断により行動した。主に避難者の受け入れ、お世話に奔走した。避難者の中で体の動くものは皆協力的に動いたが、特に本校の卒業生や在校生が積極的主体的に活動した。彼らがその後初期ボランティアの中核となった。彼らとの繋がりに加え、受け入れ施設側の立場にある本校職員は、午後3時頃当方よりの連絡を受けて来校した市職員と避難所の運営について十分な相談も出来ない状況の中で、用具の提供、施設案内等、主導的立場で活躍した。

- 18日（水） 生徒・職員の安否確認開始。
- 救援のため自衛隊到着（給食班、医療班、入浴班、給水班）。給水車常時配置。
- 県教育委員会視察及び専門家調査依頼（校舎使用の是非の確認）。
- 県教育委員会高校教育課へ臨時休業報告。
- 県災害対策本部の依頼によりNHKテレビ体育館に設置。

- 本校職員による24時間体制完了。
- 19日（木） 臨時休業・登校日（23日）案内を校区内の避難所に掲示して回る等、生徒への連絡と安否確認に奔走する。  
職員室・事務室・保健室・校長室を整備、当面の事務作業の場所を確保。  
避難所職員用外線臨時電話設置依頼。  
県教育委員会より専門家調査。中館・南館の使用禁止。  
本校被害状況調査開始。  
芦屋市から課長級職員応援、避難所運営を指揮。  
仮設トイレ20設置（芦屋市）。  
高校入試特別事情受付。  
手書きの町別避難者名簿の完成（前夜のボランティアの徹夜の作業による）。
- 20日（金） 臨時無料公衆電話・ファックス体育館1階に設置。  
体育館1階トレーニング室を救援物資置場にする。物資集積。  
校務運営委員会開催準備。  
本館漏電、至急修理。  
本校自治会執行部のコピー機を避難所運営に貸し出す。
- 21日（土） 校務運営委員会開催。  
本日予定の校内クラブ対抗駅伝中止。  
NHK・AM神戸に登校日案内の依頼。  
市災害対策本部に本校避難所への人的物的補強の依頼。
- 22日（日） 体育館1階武庫高校体育教室に県立芦屋高校避難所芦屋市対策本部室を設置。以後この部屋が、避難所の管理運営本部室となる。
- 23日（月） 震災後初めての生徒登校。本館に集合。約6割の生徒が登校。  
現時点での生徒被災状況、生徒死亡3人、家族死亡8人、全壊56人、半壊194人。  
以降本館2階会議室を3年生進路指導等の専用室とし、自習室としても開放。進路保障の立場から、出来るだけ3年学年団が進路関係の仕事に専念できる体制を組む。  
ポンプ故障で使えなかった井戸水が使用可能となり体育館へ給水開始、体育館水洗トイレ使用可能。以後度々ポンプ故障修理のため使用不能あり。  
登校生徒に避難所世話のボランティアを募る。約40名の生徒が志望する。生徒ボランティア当番表作成。  
翌24日より学校指導による本校生ボランティアが組織的に避難所で活動開始。

《解説》18日、教頭・事務長、19日、学校長が出勤し、これ以降職員の活動に核が出来た。本館の漏水被害はさほど大きなものでなく、室内の惨状はともかく、職員室・事務室とも使用可能であった。この2室を拠点に、この期間はまた交通機関の遮断、自宅被害等の理由で出勤出来ない職員も多かったが、手分けして事に当たった。特にこの期間、そして授業再開以前の1月末まで、さらに一部2月上旬までは、平常時の校内の決定システムでは到底対処できず、学校運営に関わる諸事は、管理職を中心として出勤可能な校務運営委員に図ることにより適宜進め、止むを得ず職員には事後報告により理解を求める方法がとられた。個々の方針や進め方については、昼夜を問わずストーブ談義的に出し合う話がまとまっていくことも多く、パイプ役としての教頭の存在は大きかった。非常事態とはいえ、いわゆる責任ある司令塔の存在の重要性を痛感した場面であったが、多少の混乱はあったにせよ、職員間の連携やチーム

ワークの良さもあり、大方においてうまくいったと言えよう。さて、この時期の取組の内容は大きく「学校再開の準備」と「避難所の世話」に大別出来る。

#### 「学校再開の準備」

##### ①生徒・職員の安否確認。

生徒の安否確認は、職員室と事務室の入り口に全校生の名簿を置き、登校した生徒に無事の印を入れさせた。友達の分も、必ず直接自分の目で確認出来た者については記入させ、口コミで、随時登校し、無事の記入をするよう伝えさせた。並行して、可能なかぎり学年・担任の方から、生徒に連絡を取り、口コミや電話連絡で得た情報により無事の印を入れて名簿を埋めていった。この時期、事務室の外線電話は、避難者への連絡取次、学校側の安否確認連絡等で、常時使用中の状態であった。職員の安否確認も同様に行なわれたが、生徒・職員とも最寄りの避難所に避難している者もいて、確認の徹底は難しかった。23日（震災後初の生徒登校日、登校生徒数約6割）の時点でも安否確認は完了していないが、生徒3名（各学年1名）の死亡は23日以前に確認されていた。職員は22日の時点で、安否未確認2名（23日に確認）、出勤不可能者21名（全職員72名／非常勤講師を除く）であった。

##### ②授業再開の見通しと準備。

当面休業、23日を安否確認と今後の日程連絡を主とした登校日、及び職員会議開催日と決定（19日）。口コミ、校区内避難所への掲示、AM神戸・NHKへの放送案内依頼等、可能な限りの手を尽くして、生徒・職員に連絡の徹底を図った。21日を校務運営委員会開催日とし、前日20日に校務運営委員会議案作成のための準備会を持つ。20日の準備会で在校生3名の死亡確認報告があったが、安否確認が完了するまで全校での黙禱その他の対応は控えることとした。20・21日の両会で決定し、23日の生徒登校に対応、職員会議で報告了解された内容は次の通りである。

(1)23日の日程。〈8:40職員打合せ（職員室）、9:00生徒登校〔3年あしかび（同窓）会館ホール及び本館大教室・2年本館3階5教室・1年本館4階5教室、を使用。\*3・2・1各学年、9・10・10クラスあるが、使用可能な施設で対応するための処置。生徒登校9:00は校区が狭いので可能な時間設定であるが、職員打合せ8:40は交通事情からいって不可能。これは帰りの時間を保障することを優先し、朝の打合せは可能な者だけで対応することにしたことによる。〕、11:00職員会議。〉

(2)当面の日程。24～27日生徒休業。28日生徒登校日、11:00より1年・12:00より2年・13:00より3年の、時間差登校。

\*使用可能な本館10クラス分のHR教室で1クラス1教室を当てるための工夫。

(3)唯一使用可能な本館の確保は授業再開に不可欠なので、避難所に開放する施設は体育館・柔道場及び周辺部に収めたい方向を確認した。

(4)職員会議で報告了解された内容。以下の通り。（23日職員会議で配布されたプリントの内容を転載、一部補筆）

#### 1 震災経過及び状況の報告

（省略）

#### 2 生徒・職員の被害状況等の実態調査について

\*調査表別途配布、資料欄参照。

①生徒調査表の集計はクラス・学年毎によろしく。

②職員の分は本日中に提出下さい。本日欠席された方々について、状況等ご存じの方は氏名欄の下段に代理とご記入の上、承知範囲を記入して下さい。

### 3 学校の施設・設備の被害状況について

1月19日 被害状況について専門家の調査（最終結論未定）

南館 1階支柱亀裂 使用不可能に近い。 立入禁止

中館 1階支柱の一部亀裂、2・3・4階亀裂ひどい 立入禁止

本館 漏水箇所発生

当分の間ガス、水道復旧の見通しなし（関係当局より連絡なし）

便所は仮設トイレ設置で対応。\*19日仮設トイレ20設置（芦屋市）。

### 4 学校行事の変更について

①臨時休業（1/17～21処置済、1/24～27）

②部対抗駅伝の中止 処置済。

③校内マラソン大会の中止。 1/28 生徒登校

④3年生学年末考査中止（卒業判定資料は1・2学期）

⑤1月28日（土）生徒登校 被害状況調査の継続、確認。今後の日程の連絡。

⑥修学旅行の実施の有無について当該学年団に検討依頼（その後、中止に決定）。

⑦卒業証書授与式について

会場：グラウンドか教室で放送によるか。記念品：学年と相談。

\*体育館は避難所となっており使用できない。グラウンドは自衛隊基地及び避難者の駐車場になっているが、その狭い空きスペースを工夫するか、テニスコートを使うか、本館の10教室に分散集合して放送で行なうか（特に雨天の場合）、または学校外の他会場を探すか、意見は別れた。不十分でも被災した学校で卒業式を行なうべきだと云う意見も強くあったが、卒業式は厳粛にしかも従前通りのもので3年生を送り出したいとの3年学年団の強い要望もあって、県立芦屋南高校にお願いし、日程調整の上、3月1日に県立芦屋南高校体育館を借用して行なった。

⑧その他 当分の間、部活動中止・校舎内下履き使用・自転車通学を許可。

\*部活動・下履き使用・自転車通学のその後の展開は後述。

### 5 復旧計画

①後片付け・廃棄物の搬出。

②施設・設備の破損調査及び県への要求・要望。

③中・長期的には、仮設校舎（バレーコート・テニスコートに不足HR教室分を新年度に間に合わすよう建設されること確認済。グラウンドへの特別教室分の建設時期は未定、自衛隊基地・避難者駐車場の絡みあり）・校舎改築（南館は取り壊し新築の見通し、中館は新築か改築・補修か未定）等を含めた検討。

### 6 今後の教育活動等の見通しについて

①災害復旧等については長期間になる。

②短期的には、ガス、水道等の復旧の見通しを見守りながら、当面は1月27日までに可能な範囲で授業再開を検討（本館における1・2年生の授業再開の工夫。3年生は自宅学習時期に入る。水道復旧以前の授業再開に当たっては十分な仮設トイレ設置が不可欠。）。

③避難生徒の指導及び、学習場所提供の方策。

④部活動の自粛（校内での活動再開の時期の検討、校外はクラブ事情に合わせて認める）。

\*部活動再開へのその後の展開は後述。

⑤臨時休業が長期化の場合、自宅学習の指導の在り方等の検討。

7 平成7年度高校入試事務について

8 避難市民への対応

①避難者数 現在約1100名（体育館1階550、体育館2階300、柔道場250）。＊これまでに最大1500人を越えた時期もあった。

②避難市民への24時間支援体制

〔支援人員〕

芦屋市災害対策本部より4～5名が常駐。

ボランティア約25名（当初より本校卒業生・在校生約15名、その他約10名）。

本校職員随時若干名。

自衛隊の救援隊（医療活動、給水が中心）。

＊この日、在校生にボランティア志願者を募る。約40名集まる。本校生のボランティア活動の詳細については後述。資料欄参照。

〔支援内容〕

(1)避難者の受付、誘導。

(2)救援物資の受付及び分配。

(3)食事等の受取及び配布。

(4)外部からの連絡の伝達。

(5)医療看護等の補助。

(6)苦情処理。

(7)その他（ゴミ処理）。

③芦屋市災害対策本部との調整

(1)県立芦屋高校避難所芦屋市災害対策本部として体育館1階武庫高校体育教官室を提供。

(2)役割分担の明確化。本校避難所は芦屋市が中心となり指導。本校は芦屋市の補助者として支援。

＊住民の相談や市民としての要望の窓口はあくまで芦屋市が当たり、本校は避難所の受皿としての業務を支援する。

(3)本校の分担内容。〔支援内容〕の(1)(2)(3)(4)の補助。24時間体制、特に夜間について本校職員3～4名宿泊（本館に宿泊、緊急時の対応、夜間の電話取次）。

③校内備品類の被害状況調査及び使用可能備品類の搬出

この時期余震の心配があった。余震の規模によっては南館は倒壊する恐れがあった。中館は倒壊までは至らないだろうと云う判断だった。そこで南館にあった使用可能な備品等を中館の比較的被害の少ない東側部分の教室に移す作業をした。この作業は出勤職員が手分けしておこなったが、ヘルメットの着用等慎重を要する作業であった。本格的には出勤可能職員の人数が増えてきた23日以後で、2月以降も継続した。事務では備品類の被害状況をまとめるために、各教科・課に調査報告を求めたが、上記の作業と並行して行なわれた。

④学校運営の拠点、職員が一堂に集まれる場所として、職員室の整備が行なわれた。23日の職員会議には、一応全教員の机が部署別に確保された。

⑤仮設トイレの設置。市当局は1月19日に20の仮設トイレを設置した。これは主に避難者・近隣住民のためを意識

したものであった。授業再開に向けて本校生分の補充が必要、県及び市に要求する。

「避難所の世話」

この時期避難所は、芦屋市担当職員、ボランティア（本校卒業生・在校生・他校生・その他）で運営されており、本校職員も個人の判断で随時ボランティアに参加していた。本校の姿勢として、避難所生活が安心して維持できるような補助的な協力は惜しまないが、飽くまで避難所運営の主体は芦屋市にあると云う理解にあった。職員の個人的なボランティアに加え、緊急時の対応に備え校内に24時間体制の人員配置を整え、主に避難者への電話連絡の取次等（上述、23日職員会議配布プリント、8 避難市民への対応の②避難市民への24時間支援体制〔支援内容〕(1)(2)(3)(4)）を行なった。さらに、23日の生徒登校日に在校生よりボランティアを募り、約40名の生徒が交替制でボランティアに参加した。夜間学校に宿泊勤務した職員は、宿泊可能な者に随時声を掛け、体制を組んだが、総じてお互いを気遣いながら皆協力的に応じた。この時期、避難所は避難者数の多さ、生活の不便、避難者のストレスの増大、運営システムの模索不手際等、極めて困難な状況にあったが、芦屋市の担当者に加え、本校卒業生を中心にしたボランティアがよく頑張った。芦屋市内の避難所はほとんどが市立の施設であるのに対して、本校は県立の施設であった。芦屋市災害対策本部としては、職務命令系統の違いが、他の市立施設の避難所と勝手が違うと感じていたのだろう。もっと積極的に避難所運営に関わって欲しいと思っていた節がある。学校側は、学校再開を第一に据え、避難所運営は、補助的協力を惜しまない共存共栄の姿勢を堅持した。この体制は長くは続かなかった。2月6日には芦屋市では復旧から復興へ向かうべく復興宣言がなされ、市の本来の業務も多く、しかも市職員の多くは被災者でもあり、人的に苦しい状況から学校も協力することになった。2月9日より学校が避難所運営の主体となる体制に変わることになるが、それまでの間、市と学校の軋轢は少なからずあった。但し、それは主に責任者同士の協議の場のことであり、避難所の現場で実際に活動する者同士はよく協力しあった。

24日（火）	生徒休業。
25日（木）	生徒休業。仮設トイレ6設置（市）。 本館と避難所（体育館）関係の放送を切り離す。
26日（木）	生徒休業。
27日（金）	生徒休業。3年学年末考査中止。仮設トイレ20設置（県）、総計46。
28日（土）	生徒登校（1年11時より、2年12時より、3年13時より）、約8割出席。生徒状況把握。本校職員全員出勤。職員連絡網作成。 県災害対策本部による避難所住民へのアンケート調査開始。 県にプールに生活用水の給水を依頼（プールの水は1月17日隣接民家消火のため使用済）、県企業庁より給水に来る。県域各所よりタンクローリー来校、交通事情悪化のため、深夜の作業となり2日かかる。
29日（日）	県災害対策本部による避難所住民へのアンケート調査。
30日（月）	生徒休業。授業再開準備、職員室、教室の整備。
31日（火）	生徒休業。避難所に班体制、班長会議等、組織化進む。 本・中・南館の上水復旧。周辺地域の上水復旧に先駆けての処置。中・南館は破損しているため止水。

## あ と が き

あれから間もなく1年目がやってくる。編集作業に当たって体験文集を読んでいると、当時のことがまざまざと甦り、涙を禁じ得ない。

いろんな意味で最も精神的に昂揚していた2月当初、この希有な体験はどうしても記録に残したいと思った。震災の渦中であって、学校がどのように立ち上がっていったか、責任の所在がどこか朦朧としてしまう組織的運営に慣れ切っている日常から放り出されて、非常時に学校組織は有効に機能したか、情緒的感想に終わるものでなく、混乱、軋轢、不手際も含めた客観的事実の記録と、またその時々々が何を感じたかの思いの記録を、解釈・批評を交えず出来る限りありのままに残したいと思った。記録を残す動機が、あまりの悲惨を前にして、将来再び起こるかもしれない同様の事態に少しでも善処して欲しい、そのための学習の材料となればと思ったからだ。手前味噌になるが、あの非常時を、学校運営・避難所運営ともども、大方において、本校はよく乗り越えたと思う。学校長のリーダーシップの下、本校組織が持つ総合力が為したことであるが、その過程では、当然、綺麗事では済まされない複雑な感情のぶつかり合いも少なからずあった。その部分を乗り越えていった事情こそ、後世の参考に記録に含めたいところだが、残念ながら、今、力量不足を痛感するしかない。頁数を決定する予算上の制約と云うことだけではない。学校と云う公的機関、もしくはその組織のメンバーが編集する出版物の限界かもしれない。

避難所の運営記録は、出来るだけ客観的に出来事を羅列することにした。そこから何を読み取り学習するかは、この記録を活用しようとする側に任せたいと思う。ただ残念なことは、最も混乱していた1月中の記録が残っていないことだ。避難所で付けていた日誌の1冊目が紛失してしまっていた。避難所運営に学校が組織的に関わり出したのは1月23日以降だった。この間の事情は、体験文や座談会記録から読み取っていたきたい。

なお、学校運営の記録は、当時の下野信明教頭先生（現武庫高校校長）が、職員の情報の共有化と共通理解を図るために、ほとんど毎日出されていた職員連絡メモを基礎資料にしている。あの混乱の最中、僭越ながら感服するばかりである。

さまざまな経緯から、生徒指導を担当していた私が

避難所専任を任せられたが、お蔭で貴重な体験をすることが出来た。同様の川根先生、佐和先生、無理にお願いして快く引き受けて下さった実習助手の稲葉先生、その他全職員の応援の下に、初めて取組めたことであったが、特にこの三名の方の献身的な活動には、頭が下がる思いがした。1月17日直後の最も混乱していた頃に、積極的に避難所の現場で大活躍された川根先生、校務員の豊留さんを初め幾人かの本校職員がいたが、混乱期から整理・組織化の必要が出てきた頃、川根先生が、「武官の活躍から文官の活躍への移行が大切」と云う趣旨のことを仰って、その方面に長けている佐和先生の活躍を、後押しする立場で協力を惜しまなかった姿勢は、避難所運営に関わった本校職員の有様を、象徴的に表していると思う。

もしあの非常時を、まがりなりにも乗り越え得た最大の要因を挙げよと言われたら、私は迷わず生徒の動きを挙げたい。いち早く組織的に避難所ボランティアに入った本校生の活躍は、その後の避難所のスムーズな運営に多大な貢献をしたし、それぞれとんでもない体験をした生徒達が、さまざまな制約の中で、実によく我慢し、良識ある行動をした。彼らから学ぶことは多い。一方で、震災体験が、彼らに精神的に及ぼしている影響を、私達はしっかりと見つめなければいけないと思う。しかしこの場面でも、気になることは、温度差である。震災に対する捉え方には、根本的には各人の感受性の相違があろうが、被災の状況に応じた温度差は、如何ともしがたいものがある。それは時間が経つにつれて拡大しているような気がする。実は、あらゆる震災復興の取組は、これからが正念場なんだろうと思う。あの大きな災害を体験した子供たちが、当分の間順次入学してくる。その生徒達に如何に適切な教育活動を展開できるかが、学校現場の最大の復興の取組であり、課題であろう。

震災直後、街に満ちていた善意を、忘れることが出来ない。その後、当然善意だけでは処理できない複雑さが出てきたが、当時、多くの人達がとった行動の動機は、あの善意に突き動かされたことにあると思う。善意のメカニズムが気になって仕方がない。さらに、善意を組織化する大きな知恵はないものかなどと、あてもない夢にかられたりしている。まもなく1年が過ぎようとしている。正直言って、なんとも不思議な時間だった。

〈金延 重光〉